

国際人流は、国境を越えた人の流れです。

各国にはそれぞれの国際人流があり、流れの受けとめ方も様々です。その中に、日本へのヒントもあるでしょう。海外における外国人の包摂事情をご紹介します。

【海外における外国人包摂事情シリーズ4】

公立図書館における多文化サービス： スウェーデンとデンマークの事例から

はじめに

日本の公立図書館では今、「北欧」に注目が集まっている。最近リニューアルした図書館の多くが、北欧型の空間デザインを戦略的に取り入れ、静寂な読書スペースの他に対話や交流が自然に生まれる「場」を創り出している。

また、2019年に「読書バリアフリー法」（視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律）が成立したことを機に、1960年代にスウェーデンで知的障害やディスレクシアの人にもわかりやすく読める本として生まれた「LL（スウェーデン語のLättlästの略語で「やさしく読める」という意味）ブック」を置く図書館や、1990年代にスウェーデンから始まり、特別な配慮を必要とする子どもを対象としてアクセシブルな本を集めた「りんごの棚」を設置する図書館が徐々に増えつつある。

しかし、日本の図書館は、北欧の図書館員たちが長年取り組んできた移民・難民への図書館サービス、いわゆる多文化サービスへの関心が薄い。

そこで、移民・難民が多数居住している地域にある、スウェーデンとデンマークの図書館を訪れて知った実情や気づいたことを、現場目線で紹介したい。

〈スウェーデンの事例〉

ストックホルム市立図書館

「多言語図書貸出センター」

スウェーデンでは、ストックホルム市立図書館に本部を置いている「多言語図書貸出センター」（MLC）が、国内全域の図書館に対して多言語図書資料の貸出を行っていた。

渡航前に出版物等を調べて得た知識では、MLCはストックホルム市立図書館に併設され、誰もが訪れることができる開かれた図書館との認識だった。しかし訪れてみると、ストックホルム市中心部からバスに乗って30分ほど離れた港湾地区にある倉庫に移転し、非公開に変わっていた。

MLCは、スウェーデン語やスウェーデンの少数言語を

解説者

阿部 治子 あべ・はるこ



◎ 上記写真：2024年
スウェーデンにて撮影

東京・豊島区立図書館司書。生活保護のケースワーカーとしてホームレスや生活困窮者への自立支援等にも10年間携わる。公益社団法人日本図書館協会多文化サービス委員会副委員長、「むすびめの会（図書館と多様な文化・言語的背景をもつ人々をむすぶ会）」事務局。主な共（編）著書『図書館員のための「やさしい日本語」』（日本図書館協会、2023年）、『多文化共創社会への33の提言：気づき愛Global Awareness』（都政新報社、2021年）、『多文化社会の社会教育：公民館・図書館・博物館がつくる「安心の居場所」』（明石書店、2019年）等。

除く、100以上の言語で約130,000タイトルもの多言語資料を所蔵し、国内の各図書館から日々寄せられる個別のリクエストに対して、利用者の年齢や属性、生活状況、ニーズなどを可能な限り詳しく把握した上で選書するなど、きめ細やかな貸出サービスを行っていた。

住民の約9割が移民・難民の街の リンケビュー図書館

ストックホルム市中心部から地下鉄で20分ほど離れた



視察日程と
訪問先



リンケビュー図書館が入っている建物外観。

ところにある街・リンケビュー（Rinkeby）。すぐ目の前を行き交う人々の姿は、スウェーデンではない別の国に降り立ったかのような風景だった。

リンケビュー図書館によれば、「リンケビューに住んでいる人の約9割が移民・難民であり、この地域では100以上の言語が話されている。図書館の最も重要な任務の1つは、移民・難民に対してスウェーデン語を習得できるように支援すること。もう1つは、移民・難民の母国語で書かれた文学作品を提供すること」であるという。それにしても、リンケビュー図書館にある蔵書の約9割が、スウェーデン語以外の言語で書かれた資料であると同い心底驚いた。これまで、図書館における多文化サービスとは、通常のサービスや資料を利用できない、あるいは利用しにくい文化的・言語的少数者を主たる対象とする図書館サービスのことであったと理解していたが、リンケビューの図書館では、図書館全体のサービスと多文化サービスが完全に重なっていた。

図書館における多文化サービスとは、地域特性や住民構成に応じた基本的なサービスにほかならないことに、改めて気付かされた。

リンケビュー図書館では、地域住民がストックホルム市内の他の地域よりも経済的に貧しく住環境にも恵まれていない現状と、スウェーデン語の習得なくしてスウェーデン社会での活躍が望めないとの認識に立ち、さまざまな資料やサービスを提供していた。

・複数言語での対応が可能な司書によるサービス

スウェーデン以外の国にルーツがあり、1人で3言語以上を話すことができる司書が複数名配属されていた。

・弁護士による法律相談ホットライン

約15分間、無料で弁護士から法的な助言や専門機関等を紹介してもらえるサービス。専用の個室で相談することが可能。

・パソコンを使っの文書作成・出力 サービス

図書館のパソコンを使い、各種申請に必要な文書を作成しプリンターを使って出力することができるサービス。

・スウェーデン語で聴く物語

家庭内でスウェーデン語を話さない移民・難民の子どもたちへのスウェーデン語習得支援サービスの1つ。スマートフォンを持っていない家庭に配慮し、美術館の音声ガイドと同じ装置を導入。著作権が消滅した昔話を司書自ら朗読・録音していた。これはリンケビュー図書館だけが行っている独自の取組みとのこと。

・1対1によるスウェーデン語の習得支援

これもリンケビュー図書館独自の取組みとして、スウェーデン語の習得支援を司書がマンツーマンで実施していた。

・宿題支援

子どもだけでなく若者から成人まで幅広い年齢層を対象に、赤十字のボランティアによる宿題支援が行われていた。

〈デンマークの事例〉

王立図書館「多言語コレクション」

デンマークでは、王立図書館が統計に基づき市民権を持つ住民が使用する上位20言語の資料を収集し、国内全域の図書館に対して多言語図書資料の貸出を行っていた。

渡航前に出版物等を調べて得た知識では、王立図書館内に「統合図書館センター」があるとの認識だったが、訪れると「統合図書館センター」という名称が「多言語コレクション」に変わっていた。王立図書館の担当者に名称変更の理由を尋ねたところ、「あまり意味はない」「毎年のようにデンマークの移民政策は変わっているが、図書館が行うことに変わりはない」「(移民・難民に対する図書館サービスで)重要なのは《オープン・マインド》である」と説明してくれた。

王立図書館多言語コレクションでは、各図書館からの個別のリクエストには応じていないが、迅速にニーズを把握し多言語資料を収集しているという。実際に、ウクライナ避難民の受入れが決まった直後に職員がポーランドへ行き、いち早くウクライナ語の資料を購入したとのことだった。

ナアアブロー図書館での孤独解消とウェルビーイングのための取組み

コペンハーゲン中央駅から地下鉄で約20分離れたところ



ナアアブロー図書館で参加者に無料で提供している果物やお菓子など。

ろにある街・ナアアブロー（Nørrebro）の図書館を訪れた。

ナアアブロー図書館によれば、この地区の住民はコペンハーゲン市の他の地区の中で最も経済的に貧しく、教育も充分に受けることができない移民・難民の割合が高く、コロナ終息後も孤独の問題を抱えている人が多いという。

コペンハーゲン市は、居住区がどこでも図書館サービスの内容に差をつけてはならないとの見解を示しており、ナアアブロー図書館が独自に取組む事業に対して、市からの特別な予算は認められていない。しかし、「地域特性や住民構成に応じた図書館サービスを提供することは、我々司書の使命である」と、ナアアブロー図書館の司書が熱く語ってくれた。

ナアアブロー図書館で1週間を通じて行われている、ボランティアによるユニークな活動を紹介する。司書はすべてのアクティビティの参加者のために、温かい珈琲や紅茶、冷たい牛乳、お菓子や果物などを用意し、後片付けも行っていた。

・デンマーク語のトーククラブ

最も歴史のあるデンマーク語のトーククラブ。ボランティアはデンマーク語の教師役ではなく、参加者同士の自由な話を引き出すファシリテータ役。移民・難民を包摂したコミュニティづくりと社会全体のウェルビーイングの実現を目指している。

・お父さんによる読み聞かせクラブ

アラビア語圏の父親たちが集まり、子どもたちに対して声を出して読み聞かせを行うことにより、父親も育児に参加するデンマークの価値観を自然に学ぶことができる。

・ボードゲームクラブ

主にアラビア語を母語とする高齢者に人気の活動。参加者は常連の方ばかりとのことだった。

・ITサポートカフェ

実用的なIT技術を教えてもらうことができるため、デジタル社会への適応が困難な高齢者や移民・難民等に人気のカフェ。

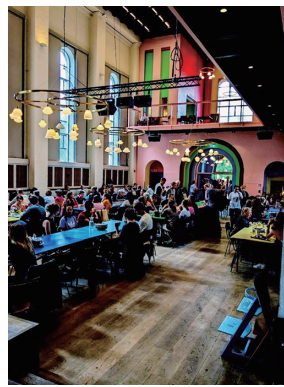
・シェア読書会

参加者が助け合いながら読み進め、お互いに感じたことを自由に話すことで対話が生まれ、読書の楽しさを広げている。

誰かと繋がることで

人生は意味のあるものになる

孤独が社会問題になっているデンマークでは、誰かと一緒に食べると孤独が減りウェルビーイングの向上に繋がるとして、「共食（フェレスピスニン：Fællesspisning）」



「共食イベント」で提供されたヴィーガン料理。

※写真4点すべて、2024年7月
筆者撮影

旧教会で開かれている「共食イベント」の様子。

イベントが各地で開催されている。そこで、コペンハーゲン中央駅から徒歩で約20分のところにある、元教会を改修してつくられた民間のコミュニティ・スペース「フォルケフセット・アブサロン（Folkehuset Absalon）」での共食イベントに参加してみた。

食事のメニューは多様な参加者を考慮し、動物性食品を一切使用していないヴィーガン料理だった。

まず、8人掛けのテーブルで偶然出会った見ず知らずの人同士で、食べ物等を取りに行く人や、大皿料理を取り分け、食べ終えた後の食器を重ねて運ぶ人を決めなければならず、すぐに参加者同士によるデンマーク語での会話が始まった。そのとき1人の若者から「あなたは何語を話しますか」と訊かれ、私は「日本語を話します」と答えたところ、同じテーブルにいた参加者たちは、すぐに『やさしい英語』に言葉を切り替えてくれた。私に対して「何人であるか」を訊かずに、同じ食卓を囲む仲間として受け入れてくれたその心遣いが、「外国人」である私には嬉しかった。

おわりに

北欧といえば図書館政策の先進国として知られている。今回は、その北欧の中のスウェーデンとデンマークの図書館に着目し、移民・難民へのサービスの今の姿を自分で確かめた情報に更新することができた。

日本の公立図書館における多文化サービスはまだ発展途上にあるが、住民の孤独解消や社会全体のウェルビーイングの実現という共通課題に取り組むため、国を越えた友情を育んでいきたい。

【関連文献】

阿部治子「図書館の多文化サービス：外国人住民のウェルビーイングのための司書のコーディネート力に着目して」『情報の科学と技術』74巻10号（2024年、p.419-424）<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I033733724>